

京都女子大学図書館蔵元禄頃写『方丈記』紹介

——柳亭種彦自筆校合本——

中 前 正 志

一 書誌と伝来

京都女子大学図書館の「方丈記コレクション」⁽¹⁾のうち、同図書館が登録書名を「古鈔本方丈記」とする『方丈記』写本一冊がある（請求記号 914.42/A6 資料ID 0085104973）。書誌事項の概略などは、拙編『東山中世文学論纂』（私家版、平26）にも記載しているが、およそ次の通り。

縦二四・八×横一七・二cmの袋綴一冊。柿色渋引表紙。楮紙。表紙以外全三三丁（うち前遊紙・原前表紙・原後表紙各一丁）。外題「方丈記^{黒川本}柳亭種彦自筆校合本」（左上貼付題簽に墨書）、内題「加茂長明無明書」。茶色原前表紙の左上題簽に墨書「方丈記 古写本」（古写本）は朱書、右上に朱円印「物語」、その左下に朱書「柳亭種彦校本」。一面八行。

漢字交じり平仮名文。全面的に朱の濁点や振り仮名、句切符号、異本注記などあり。末尾に「月影は」歌あり。そのあと最末尾に、別筆にて「幽居記唯元」を載せる（ただし、後半部欠）。本文冒頭部に、陽刻朱長方印四種「宝玲文庫」「黒川真頼藏書」「黒川真道藏書」「不羈斎／函書記」（秋山不羈斎）、また陽刻朱円印「黒川真頼」あり。本文末尾部には陽刻朱正方印「月明荘」（反町茂雄）が見える。

黒川家藏書印が計三種捺され、外題右上には「黒川本」と記されるが、柴田光彦編『黒川文庫目録』（日本書誌学大系86・1、青裳堂書店、平12）の廿四「物語」に、

方丈記

古写本
（柳亭種彦校本）

一

と著録されている（第二七九号）、それが、右の通り原前表紙に朱書「古写本」「柳亭種彦校本」および朱円印「物語」の存する、右写本に相当するに違いない。「京都女子大学図書館所蔵『方丈記』元治元年写本——「聴雨大人」林蓮阿校正本——」（『国文論藻』18、平31）にて取り上げた聴雨校正本（請求記号 914.42/A6 資料ID 0085105058）と合わせて、「方丈記コレクション」には黒川文庫旧蔵の『方丈記』写本が計二点含まれていることになる。

右写本には、書誌事項として挙げた通り、黒川家以外の所蔵印「宝玲文庫」「月明荘」も見られるが、それらとも対応して、横山學編『フランク・ホーレー旧蔵「宝玲文庫」資料集成』第1巻（ゆまに書房、平29）収録の『資料02（ノート・標注令義解）』第1巻に、

方丈記

柳亭種彦自筆校合本古写本

一冊一帙

反町茂雄『一古書肆の思い出3 古典籍の奔流横溢』（平凡社 昭63）が、昭和二十一年一月「下旬に黒川家の蔵書の一部分を買いました。……主要なものは左の通りです」として二十点列挙する（58〜60頁）なかに、

方丈記

元禄頃写
柳亭種彦自筆校合本

一冊

京都女子大学図書館蔵元禄頃写『方丈記』紹介

と見える。反町右掲書はまた、右二十点について、「各冊に、黒川家の蔵書印が二つ乃至三つずつ押捺されており、保存がよく、好ましい稀観本ばかり。弘文荘に真向きでした。この他の六、七点を合わせたグループの、三分の二ほどは一月二十二日に、タツミヤ書店中村不二尾氏の持ち込んで売ってくれたものでした。残る三分の一は、その数日後に、江戸・東京の郷土史家島田筑波さんのもたらされたもの」と述べてもいる。

小稿の取り上げる『方丈記』写本は、黒川家のほか、右の弘文荘、宝玲文庫、さらに今一つ見える所蔵印の主である秋山不羈斎などを経て、最終的には昭和六十年、臨川書店を通して京都女子大学図書館が購入したものである。

二 元禄頃写本本文の位置

右の反町著書が先引通り、当該写本について「元禄頃写」と推定しているが、それは確かに、墨痕から受ける印象などと齟齬せず、妥当なものと思われる。その元禄頃写本に、先にも触れたが、後世、朱による濁点や振り仮名、区切符合、そして異本注記を中心とする注記が、ほぼ全面的に加えられている（後掲【影印】元禄頃写『方丈記』（柳亭種彦自筆校合本）2オ・21オ参照）。それら、特に異本注記については、後述する。なお、ごく一部には、本文と同筆らしく元禄頃当初のものと覚しい、朱筆でない濁点も見られる（後掲【翻刻】元禄頃写『方丈記』（柳亭種彦自筆校合本）参照）。

元禄頃写本の本文は、地震で土塀が崩れて武士の子が圧死したという内容を含んでいるか否かなど、広本のうちの古本系統と流布本系統とを分かち主要な指標として通常挙げられる三点がいずれも、流布本系統の特徴と合致しているのであって、流布本系統のものであるに違いない。さらに、大福光寺本を初めとする古本系統の十一伝本と正保版本に至る流布本系統の六伝本の本文を逐一対照する青木倫子編『広本略本方丈記総索引』（武蔵野書院、昭40）におい

て、右の三つの指標のほかに、古本系統と流布本系統の間で本文が完全に対立している場合が百箇所余り見られるが、元禄頃写本の本文は、それらのうち二箇所以外すべて流布本系統の本文となっている。そして、その二箇所とは、次の通り（数字は行番号、以下同。後掲【翻刻】参照）。

112 今の世の有さま（古本系統諸本「世」流布本系統諸本「世中」）

142 新さへ乏しく成ゆけば（古本系統諸本「さへ」流布本系統諸本「にさへ」）

「中」「に」の有無だけのごく微細な差異であつて、単純で偶発的な誤写などによつて、「世中」↓「世」、「にさへ」↓「さへ」と、流布本系統本文から古本系統本文が生じる可能性も低くないだろう。そうした二箇所のみが古本系統本文になつていただけで、他はすべて流布本系統本文になつていたのである。

以上より確かに、当該写本は、まさに流布本系統に属するものと捉えて間違いない。そして、『広本略本方丈記総索引』が取り上げる流布本系統の六本と見比べると、それらの中では嵯峨本と最も近似するようである。

嵯峨本（国文学研究資料館影印叢書7）と、嵯峨本に近い正保版本との間で、本文の異なる箇所について、当該写本がいずれと合致するか、試みに確認するに、

〔嵯峨本〕（嵯）

〔正保版本〕（正）

〔元禄頃写本〕

撰津国今の京

撰津国今の京

85 撰津国今の京

|| 正

瑞相か

瑞相とか

102 瑞相哉と

|| 嵯

縁に結はしむる

縁を結ばしむる

163 縁に結はしむる

|| 嵯

ためし有けり

ためしは有ける

172 ためし有ける

|| 嵯

ためし有けり

ためしは有ける

172 ためし有ける

|| 正

悦ふ事あれども

よるこぶ事はあれども

216 悦ふ事あれども

|| 嵯

まめならぬ

まめならざる

300 まめならぬ

|| 嵯

事これ同し

事はこれ同し

319 事は同し

|| 嵯

すそ川の田井

すそはの田井

321 すそ川の田井

|| 嵯

歸さまには

歸るさには

331 歸るさには

|| 正

生涯の海

生涯の望み

405 生涯の海

|| 嵯

さとらむ

さとさむ

416 悟らむ

|| 嵯

というように、正保版本と一致する場合も見られるが、嵯峨本と一致する場合が多く、嵯峨本により一層近いこと、明らかであろう。

また、元禄頃写本に

118 夏種とるいとなみ

とある箇所を、『広本略本方丈記総索引』の取り上げる計十七の伝本のうちでは、ほとんどが「なつ(夏) うふ(ゆ) るいとなみ(營)」とするなか、嵯峨本と京大本だけが「夏種とるいとなみ」と記すことや、元禄頃写本が

106 家とも如何に成りけるにか

423 如何用なき楽みをのへて

と表記する箇所をいずれも、『広本略本方丈記総索引』の取り上げる計十七伝本のうち嵯峨本だけが同じく「如何」とすることも、嵯峨本との近さを示唆するところがあるだろう。

しかしながら、嵯峨本の本文と一々校合してみると、嵯峨本と異なる本文が少なからず検出される(後掲【校異】)

元禄頃写『方丈記』と嵯峨本『方丈記』参照。それらのうち、

1 凡川の流れば絶すして 嵯峨本「行川の流れば絶すして」

414 魚は水にあかす。鳥は林をねかふ。鳥にあらされは其心をしらす。

285 正木 嵯峨本「柴」

嵯峨本「魚は水にあかす。うほにあらされは其心をしらす。鳥は林をねかふ。鳥にあらされは其心をしらす」といった事例では、嵯峨本に拠って書写しつつ、二重実線部においては誤写を生じさせたり、実線部については誤って脱落させたりしたものと捉えることができよう。しかし、例えば

92 いつれもせきあへす 嵯峨本「川もせきあへす」

の場合、波線部「いつれ」は、「河」を「何」と誤読（誤写）したところから生じたものと見られるところであって、嵯峨本本文の「川」からは直接生じ得ないものである。さらに、やはり嵯峨本に直接拠った結果とは考えられない本文が他にも、

16 無常を争へるためし、朝かほの露にことならず。

289 なかめ 嵯峨本「かけ樋」

など、少なからず見られる。さらに、嵯峨本と相違する本文が、他の流布本系統諸本とは一致せず、古本系統諸本のいくつかと一致する、という事例も相当数存する（後掲【校異】参照）。

元禄頃写本の本文は、嵯峨本に近いことは確かだが、しかし嵯峨本に拠ったものでは決してなく、かつ、同本からかなりの距離を置いたものである、ということになる。また、356「夜臥床有昼居る座有」といった漢字表記が目につく点や、330「瀬田の川」435「鼻鐘の念仏」などの特異な本文が見られる点にも、注意されようか。なお、誤写の類少なからず、決して良質の本文とはいえない。

三 朱筆書入れ

小稿の取り上げる『方丈記』写本は先述通り、元禄頃に書写された本文に後世、朱筆の書入れを様々に施している。それは、内題「加茂長明無明書」の「無明書」に傍点を付し、内題の上方に「方丈記」と記すのを皮切りとして、濁点や片仮名による振り仮名および句切符号を全面的に、返り点（4「如^レ此」、360「不^レ願不^レ交」、367「不^レ造」、など）、片仮名による送り仮名（94「造^レる家」、197「暫^シ」、410「乞食と成^レ事」、など）、虫損文字について補った傍記（虫損により一部欠損した104「冬」の右に「冬」と傍記、など）、読みにくい文字について補った傍記（289「南に」の「に」の右に「に」と傍記、など）を一部に、それぞれ加えるほかは、異本注記を中心とした種々の注記であって、行間および天部余白に書き入れている。

行間の異本注記の場合、異本本文と異なる元禄頃筆写本文Ⅱ注記対象本文の右に、ほとんどは小さく「イ」と書いてうえで異本本文を記載するという形を基本としていて、それに加えて注記対象本文の左に「○」印を付した場合もあるし（238「踏」の左に「○」印を付したうえで右に「イ跡」と傍記、など）、注記対象の本文がある程度長い時などは、その本文の範囲を示す記号を付してもいる（後掲【影印】2オL1・21オL7など）。「イ」と書いて異本本文を示すのではなく、異本本文を示したうえで、その右下に小さく「イ」と書いた事例も存する（後掲【影印】2オL5のほか、49「吹まくる」の「く」の右に「はイ」と傍記、など）。また、元禄頃筆写本文にない本文が異本に存する場合、元禄頃筆写本文の該当箇所「△」印や「○」印を付し、その右側（162「て」と「死」の間の事例のように、稀に左側）に、「イ△」「イ○」または単に「△」「○」あるいは「イ」と書いて、その箇所に存する該当の異本本文を記載している（54「垣をはらひて」の「を」と「は」の間に「○」印を付して右に「イ吹」と傍記、など）。その場合、「○」

あるいは「△」の印同士を線で結んだ事例も見られる（後掲【影印】2オL4のほか、104「むなしからされは」の「さ」と「れ」の間に○印、その右に「イ○りけ」と記し、○印同士を線で結んでいる、など）。あるいは、元禄頃筆写本文の該箇所にも右側の傍記にも「△」や「○」の印を全く付すことなく、「イ」として該箇の異本文を示した事例（172「ためし有ける」の「し」と「有」の中間右側に「イは」と傍記、など）も見られる。逆に、元禄頃筆写本文に存する本文が異本にない場合、当該の本文の左側に○印を付し、同本文の右に「イナシ」と書いている（51「平地」の「地」の左に○印を付し右側に「イナシ」と傍記、など）。

また、単に異本文を示すだけに止まらない場合も見られる。115「二年か間に」の「に」の左に小さく○印を付し、その「に」の右に「イナシ」と記すが、それだけでなく、そのさらに右に「衍字敷」と書き付けている。284「すいひつ」の「い」に○印を付したうえで右に「衍字」と傍記するのと、353「炎上にほころひ」の「こ」に対して同様に「衍字」と傍記するのは、右の「二年か間に」の場合が、異本文について注記したうえで衍字かと推測しているのとは異なり、校合に基づく異本注記という要素を少なくとも表面的には全く持たない。実際には、異本文をも参照したうえで傍記しているのかもしれないが。

異本注記から、それに止まらない内容へと、天部余白においてより顕著に展開する場合もある。54「垣をはらひて」の箇所、右にも例として挙げた通り、「を」と「は」の間に「○」印を付して、右に「イ吹」と傍記するが、それに止まらず、この箇所の上方の天部余白に「吹 ナキカタ／是ナル／ベシ」と記している。単に異本文を注記するだけでなく、その異本文の「吹」のない方が適当であるとの推測を示しているのである。174「元暦の比」の箇所でも、「暦」と「の」の間に「△」印を付し、その右に「イ△」と書いて「二年」と傍記、その「二年」全体を□で囲んでいて、さらに、天部余白から次行との行間に及ぶ形で、「異本は／後人／二年と／側に書そへたるが本文へいりしにや」

と記している。行間の異本注記で終わらずに、こちらの場合は異本文派生過程についての推測を、天部余白などに展開しているのである。

行間でなく専ら天部余白に異本注記などがなされる場合もある。122 「其驗更に」に対して、行間に傍記は何もないが、天部余白に「イ更にその／しるし」と異本文を示している。277 「黒革籠」に対する天部余白の書入れ「黒革／籠／イ黒ノ字ナシ／アルカタ／是歟」、281 「をとろ」に対する天部余白の書入れ「おどろ／イニ／ほどろ／ある非也」の場合、やはり異本本文について注記するが、さらにそれだけでなく、本来の本文あるいは異本本文の是非について推断する。283 「長く机を作り」に対しては天部余白に「長く／イニナシ／出し／ふづくゑ／也」と記しており、同じく異本文について注記したうえで、こちらの場合にはさらに、語釈をも加えている。

天部余白の書入れには、異本注記と関わることのない語釈も見られる。241 「居屋」に対する天部余白の書入れ「居屋／今いふ／居間」、271 「日かくし」に対する天部余白の書入れ「日かくし／ひさし也」、である。322 「ほくみ」に対しては、右に傍点(□□□)を付したうえで、天部余白に「ほくみ^{□□□}／穂組／角力草／の類の／手あそ／びか／又食類歟／イ本ニ／ほくみト／アリ／元隣本ニハ／ほぐみト／にこり／を／うちたり」と記す。語釈を中心としつつ、異本文にも言及している(後掲【影印】21才参照)。

なお、他は全く同形式でありながら、「イ」の有無だけが異なる場合がある。例えば、15 「身を悦はしむる」の「身」の右には「イ目」と傍記するが、47 「中御門京極の辺」の「辺」の右にはただ「程」と傍記する。この後者の場合は、「イ」と断らないだけで、異本本文を注記したものと見られようか。日現本や氏孝本が「ほとり」とする一方、大福光寺本や嵯峨本が「ホト」「程」とする。しかし、1 「凡」に対して「行」とだけ傍記するのは、先に挙げた「衍字」と傍記する事例と性格上近く、異本本文を注記したものであるというよりも、誤写を指摘し、それを修正しようという意識に

基づくもの、誤写修正注記というべきものと見られよう。263 「高さは七尺かなち也」の「な」の右に「う」と傍記するような事例は、尚更そのように捉えられよう。189 「築地の覆の山に小家を作りて」の「山」の右にも単に「下」と傍記するが、この場合は、天部余白に「按下草書の／下字ヨリ／山ト／誤シ／也」と記しており、誤写修正注記であることが、ほぼ明らかだろう。これらの中間、異本注記なのか誤写修正注記なのか、意識としてどちらに重点があるのか、明確でない場合も少なくない。あるいは、「○」印でなく「●」印を使った事例も見られる。例えば、387 「もうして心を動す事なし」の「て」と「心」の間に●印を付して、その右に「イ」なく「●も」と傍記する。

以上の通り、朱筆書入れは実に多様であるが、筆跡などから見て、すべて同筆かと見られる。元禄頃筆写本文に

230 232 人頼めは身他の僕となる人を育は心恩愛につかはる

とある箇所、朱筆は、「頼めば」「育ば」「僕」と濁点・振り仮名を加え、「育ば」「つかはる。」と区切符を付しているが、それら以外さらに、「僕となる」の「る」の右に小さく「り。」と傍記する。異文「り」と、それに伴う区切符「。」が、一連のものとして、一筆に書き入れられているのである。こうした事例は、区切符なども含めて朱筆書入れ全体が同筆であることを物語っているだろう。

四 柳亭種彦の自筆校合

異本注記をはじめとする朱筆書入れについて、その形式などを右のように微細に確認したのは、小稿の取り上げる『方丈記』写本が柳亭種彦自筆校合本とされているからである。同写本には、先述通り、原前表紙に「柳亭種彦校本」と朱書され、外題下には「柳亭種彦自筆校合本」と記されていて、そのことは、先引『黒川文庫目録』以下にいずれも「柳亭種彦校本」「柳亭種彦自筆校合本」と、継承あるいは追認されている。

この柳亭種彦自筆校合本という点を確認するのに、種彦自筆資料が種々存するなかで、筑波大学附属図書館所蔵『草短歌』一冊は、誠に相応しい対比資料となろう。同じく「柳亭種彦自筆校合本⁽²⁾」として知られるものだからである。後遊紙に存する文化年間の種彦による識語に「草短歌一冊／記者未考／慶長元和中の古書なるへし」、種彦による前遊紙朱書書入れに「何某の所蔵に寛文中の古写あり。そうき短歌とあり。……今、彼書をもて異同を校正ス」と見える。「慶長元和中の古書」に種彦自らが、「寛文中の古写」との校合結果を書き入れたものということになる。この『草短歌』は新日本古典籍総合データベースに画像が公開されているので、それによって、二つの「柳亭種彦自筆校合本」を見比べたい。

異本注記のあり方について見るに、全く同じというわけでは無論ないが、共通点がかなり拵がっていることを確認し得る。

小稿の取り上げる元禄頃写本『方丈記』の異本注記について、「注記対象本文の右に、ほとんどは小さく「イ」と書いたうえで異本本文を記載するという形を基本としていて」「注記対象の本文がある程度長い時などは、その本文の範囲を示す記号を付してもいる」と先に述べたが、それは『草短歌』でも同じであって、同様の異本注記が数多く見られる。例えば、「いろみせず」の「せ」の右に「イエ」と傍記し（本文1オ）、「心たしなみて」のうち「た」「み」までの範囲が注記対象本文であることを、当該『方丈記』写本に見られるのと同様の記号で示し、その右に「イをたしく」と傍記している（本文1オ）。また、当該『方丈記』写本について、「元禄頃筆写本文にない本文が異本に存する場合、元禄頃筆写本文の該当箇所」「△」印や「○」印を付し、「……」とも先述したが、『草短歌』においても、「人になさけあり」の「に」と「な」の間に「○」印を付して「イ○も」と傍記した事例（本文2ウ）や、「いよ／＼せめてのなぐさみに。人だにくれれば物のぞき」の「に」と「人」の間に、区切符号の「。」とは別にさらに「○」印を付し

て「イ〇こそ」と傍記し、〇印同士を線で結んだ事例（本文3ウ）が認められる。さらには、当該『方丈記』写本における行間の注記が「単に異本文を示すだけに止まらない場合も見られる」として、「衍字歟」「衍字」と傍記された事例を先に挙げたが、類似の事例は『草短歌』にも、「おもき」に対する傍記「脱文歟」（本文8ウ）、「おもひ」の「おも」に対する傍記「よそ歟」（本文8ウ）、「みつになてんす」に対する傍記「不解」（本文18オ）、など認められる。

当該『方丈記』写本では、「異本注記から、それに止まらない内容へと、天部余白においてより顕著に展開する場合もある」と先に述べた点についても、近い事例を『草短歌』に見ることができ。例えば、〇印などを付して右側行間に「脱文イ」と記したうえで天部余白に、「イ」および〇印などとともに「あかつきたれと……」と異本文を掲げているが、それだけでなく、その異本文の一部について「此間不解」と述べている（本文5オ）。また、当該『方丈記』写本について、「行間ではなく専ら天部余白に異本注記などがなされる場合もある」とも記したが、『草短歌』にも同様の事例が、「異本ニ女房御みもちの事」（本文1オ天部余白）「イ心にはふた声みこゑよばれしと」（本文5ウ天部余白）「以下異本になし」（本文7ウ天部余白）などと見える。当該『方丈記』写本の場合、先述通り、「異本文派生過程についての推測」や、「本来の本文あるいは異本文の是非について」の「推断」、「異本注記と関わることのない語釈」が見られたりもするが、それらについてもやはり、『草短歌』でも同様の事例を検出し得る。例えば、「一葉脱シタルヲ其儘写シシナルベシ」（本文14ウ天部余白）「脱歟」（本文15ウ天部余白）「写誤歟」（本文20ウ天部余白）「小家造作歟」（本文17ウ天部余白）「家ぬし主人也」（本文18ウ天部余白）のように。

「イ」と断らない形での異本本文注記もしくは誤写修正注記というべきものが当該『方丈記』写本に見られることも先述したが、『草短歌』でも同様に、例えば、「みよかしげなる」の「げ」の右に「がほの」（本文4オ）、「たしなめば」の「め」の右に「みぬれ」（本文5ウ）、と傍記している。あるいは、当該『方丈記』写本には、「〇」印でなく「●」

印を使った場合も見られたが、『草短歌』でも、「こてまねき。人のあるなか」の「き。」と「人」の間に●印を付し、それと曲線で結んだ右脇の●印の下に「つま戸のきはの手たはふれ」と記していたりする（本文6ウ）。

以上のように共通点あるいは類似点が多く認められるが、しかしながら、これらのうちには、「校合本」であればおよそ共通することになるという部分も少なくないに違いない。種彦による校合であり、さらには種彦自筆のものであるという点を確認するためには、筆跡の検討が不可欠であろう。当該『方丈記』写本の朱筆書入れは文字数が少なく、筆跡の検討をするのに充分とは言い難いところがある。しかし、その書入れと、『草短歌』の書入れ、また『吉原買もの調』付載種彦自筆標注（『柳翁標注』⁽²⁾）、さらには『田舎源氏』第四編自筆稿本や『骨董集ほりかひ』自筆原稿⁽³⁾とを、筆跡について比較するに、種彦の筆跡などに通じているわけでは全然ない稿者ではあるがそれでも、まさに同一のものという印象が得られた。そこで試みに、当該『方丈記』写本の朱筆書入れと『草短歌』書入れ・『吉原買もの調』付載標注の中から、共通して存在し、特徴的な面があるかと見られた文字を、いくらか対照させたものを、作成してみた（後掲「筆跡対照」元禄頃写『方丈記』・『草短歌』・『吉原買もの調』）。確かに酷似しているのではないか。右の全体的な印象が裏付けられたと言うべく、先に確認した異本注記のあり方の共通性のうえにこの筆跡の検討結果も加えるならば、当該『方丈記』写本について継承されきた見立て「柳亭種彦自筆校合本」に問題なく、紛れもなく種彦が校合結果などを書き入れた種彦自筆のものであると確定していいのではないかと考えられる。

なお、『初代柳亭蔵書目録』⁽⁴⁾第一冊に、「方丈記 一冊（冊）」が見える（20才）。それは、小稿の取り上げる元禄頃写本そのものか、右校合に使用された「イ本」であるのかもしれない。

五 柳亭種彦使用対校本

『初代柳亭蔵書目録』著録の「方丈記」が校合の際の「イ本」であった可能性について右に述べたが、校合に当たって実際に、種彦がいかなる本文を有するどのような伝本を対校本としていたのか、それを明らかにすることは難しい。例えば、元禄頃写本の末尾部に、435〜436「鳧鐘ノの念仏ハ三返申てやみぬ」という特異な本文が見られる。恐らくは、「不請」「不祥」「不浄」など↓「ふしやう」↓「鳧鐘」といった経路を辿って生じた本文に違いあるまい。この特異な派生本文に対して、種彦は全く何も注記していないが、種彦の手許にあった対校本も同じく「鳧鐘」であった可能性は極めて低いであろう。さらに例えば、元禄頃写本に

36〜37 其中の人現心ならんや。「或煙にむせひて倒れ伏し」或焰にまかれて忽に死ぬ。

187 おそれぬ中にをそるへきは、唯地震也トとこそ覚え侍りしか。

413〜415 ……魚鳥のありさまとみよ。魚は水にあかす。鳥は林をねかふ。鳥にあらされは其心をしらす。鳥は其心をしらす。

と見える部分、諸本においては、少なくとも『広本略本方丈記総索引』の取り上げる広本系統の十七の諸本においては、いづれも、若干の文言の違いはあっても、「」内に載せた本文が共通して、その位置に入っているのに対して、当該『方丈記』写本にはその本文がない。しかし、右の三箇所のだれにも、種彦は何ら注記していない。種彦の手許にあった対校本が、これら三箇所の本文の誤脱を三箇所とも同じように含んだものであったという偶然も、かなり想定し難いであろう。序でに右引中の二重傍線部「ぬ」「と」は明らかに、「の」「を」を誤写したものに違いないが、それらについてもやはり種彦の注記はない。

種彦の校合およびその結果としての異本注記は、前々節に述べた注記のあり方からも窺えるだろうが、全体として相当に丹念に緻密になされているものと認められる。しかし、右のような事例は、種彦が対校本との相違点を逐一漏らさず注記しているわけではないことを強く示唆しているであろう²⁶⁵「打覆をふき。てづき目毎に」のように、種彦の誤読によるらしい区切符号や濁点が見られもする。ということは、種彦が注記した異本本文をすべて元禄頃写本に反映させたとしても、種彦の手許にあった対校本の本文にはなり得ない、それを完全に復元することはできない、ということになる。したがって、実際に異本本文として注記されているのが概ね、正保版本と同様の本文になっていることは看取し得るものの、いかなるものを種彦が対校本としていたのか、明らかにすることが難しいのである。

ただ一方で、校合などの折に種彦の手許にあったことが明らかなものも存する。先にも引いたが、³²²「ほくみ」に対する天部余白の注記に、「元隣本ニハほぐみトにごりをうちたり」と見える。「元隣本」とは、山岡元隣の『鴨長明方丈記之抄』〔首書方丈記〕であるに違いない。同書は確かに、「ほぐみ」とする。同書が種彦の手許にあったことは明らかである。しかし、正保版本に拠ったとされる同書所載の『方丈記』本文が、対校本として使用されていたかどうかはわからない。上引注記の直前に「イ本ニほぐみトアリ」と記すから、元隣本とは異なる「イ本」も、種彦の手許にあったようである。元隣本とこの「イ本」と併せて少なくとも二種の対校本を手許に置いて、校合していたのかも知れない。例えば、先に筆跡比較の資料の一つとした種彦の考証随筆『骨董集ほりかひ』について、「一つの資料を引用する際にも、刊年の異なる写本や刊本を比較すること」が、特徴の一つとして見出されているから、²⁶⁵複数の対校本が種彦の手許にあってもおかしくないばかりか、その可能性の方が高いと言えるだろうか。

小稿においては、京都女子大学図書館所蔵元禄頃写『方丈記』を取り上げ、その伝来や本文の位置といった基礎的

な事柄について一瞥しておいたうえで、全面的に見られる朱筆書入が、校合結果に基づく異本注記を中心としたものであり、そして、紛れもなく柳亭種彦自筆のものであることを確認し得た。さらに、書入れを含めた全体の翻刻等を後掲してもいる。いつの時点のものなのか、いかなる対校本が手許にあったかなどは不詳ながら、『草短歌』と同様の柳亭種彦自筆校合本の全容が、種彦の文献学的な営為の一つとして新たに、明るみに出たことになる。また、それは、近世における『方丈記』享受の一面面としても銘記されるべきものでもあろう。全体の影印を付載することが望ましいのであろうが、諸般の事情あつて難しく、それについては別の機会を待つこととしたい。

〈注〉

- (1) 拙稿「京都女子大学図書館『方丈記コレクション』―概要と『方丈記宜春抄』新出写本紹介―」『女子大國文』171、令4 参照。
- (2) 池田廣司編『中世近世道歌集』(古典文庫一八〇、昭37)。その他、福井久藏編『大日本歌書綜覧』(不二書房、昭2)や高木三男「草短歌」(筑波大学附属図書館報『つくばね』第五卷第三号、昭54)参照。
- (3) 天理図書館善本叢書^{和語}第十一卷『遊女評判記集』(八木書店、昭48) 所載影印に拠る。
- (4) 国立国会図書館デジタルコレクション。
- (5) 佐藤悟「柳亭種彦『骨董集ほりかひ』解題と影印」『近世文学論輯』和泉書院、平5) 所載影印に拠る。
- (6) 日本古典文学影印叢刊32『近世書目集』(日本古典文学会、平1) 所載影印(佐藤悟解説)に拠る。また、松本隆信「初代柳亭蔵書目録 写本二冊 慶応義塾図書館蔵」(国文学論叢第一輯『西鶴 研究と資料』至文堂、昭32) 参照。
- (7) 金美眞『柳亭種彦の合巻の世界―過去を蘇らせる力「考証」―』(若草書房、平29) 第一章『骨董集ほりかひ』考。

【付記】

- ・元禄頃筆写そのものを引用する場合、種彦の書入れとは別に、適宜句読点などを施している。
- ・小稿は、令和四年度大学院文学研究科における授業「中世文学演習ⅠB」の中で、受講生の澤田明日香と行った検討を、一つの出発点としたものである。
- ・この度思い掛けず訃報に接することとなりました井上博嗣先生には、本学着任以来長きに亘り大変お世話になりました。改めて感謝申し上げますとともに、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

【翻刻】元禄頃写『方丈記』（柳亭種彦自筆校合本）

- ・翻刻に当たっては、基本的に通行字体に改めた。
- ・行送りは元のままとし、行番号を五行ごとに行頭に付した。また、半丁ごとに、その末尾を「1オなど」と示した。
- ・様々に施された朱筆書入れのうち、振り仮名（片仮名）・傍記送り仮名（片仮名）と濁点・返り点・区切り符号は、それをそのまま加えた形で翻刻した。また、区切り符号は句点とした。すなわち、振り仮名（片仮名）・傍記送り仮名（片仮名）・濁点・返り点・句点（区切り符号）は、すべて朱筆書入れによるものである（逆に、それら以外の傍記や見せ消ちは、朱筆書入れによるものでなく、元禄頃筆写本文と同筆の、元のもの）。ただし、濁点の一部には、朱筆書入れによるものでなく、元禄頃筆写本文と同筆の、元のものがある。それらについては、下欄に*印を冠して注記した。
- ・右以外の朱筆書入れについては、下欄に示す。書入れの見られる行の番号を掲げたいうえで、書入れのある位置などとともに掲出した。

・朱筆書入れが異本本文を注記する際、同本文と対応する元禄頃筆写本文の範囲を明示するための線が引かれていたりするが（後掲『影印』元禄頃写『方丈記』（柳亭種彦自筆校合本）2オ・21オ参照）、そうしたものは再現し得ていない。ただ、例えば「16『へるためし』」に対して、その右に「イひ去さまいはゞ」というように記した場合、異本本文（「イひ去さまいはゞ」）と対応する元禄頃写本文「へるためし」の範囲が、線を引くなど何らかの形で明示されていることを意味している。一方、例えば「1『凡』の右に『行』」のように記した場合、元禄頃写本文「凡」に対して、その右に異本本文「行」が注記されていると判断されるものの、対応する元禄頃写本文の範囲が明示されているわけではないことを意味している。

・例えば「65『さ』（字母「散」る）の右に『サ』」の場合、傍線部の元禄頃写本文「さ」の右に、「サ」と注記されていることを意味している。

凡川の流れば絶ずしてしかも本の水に

あらず。淀ヨドにかぶうたかたは。且消且結び

て久しくとまる事なし。世界ヨソナカにある

人と。住家と。又如カク此。玉敷の都の内に。

5棟をならべ麓をあらそへる。高きいや

しき人の住居は。世々をへてつきせぬ

ものなれど。是を誠かと尋ぬれば。むかし

有し家はまれもあるは大家はほろびて

小家となり。住人も是に同じ。所もかはらず

「1オ

1「凡」の右に「行」。

9「り」の右に「いる」。

10 人もおほかれど。いにしへ見し人は。二三十人が

中に僅に一人二人也。朝に死し夕に

生るゝならひ。唯水の泡に似たりけり。

しらず死る人何方より来りて何方へか

さる。又しらず。仮のやとり誰が為に心を

15 悩し何によりてか身を悦ばしむる。其あるじと

住家と。無常を争へるためし朝かほの

露にことならず。あるは露おちて花残り

けり。残るといへども朝日にかれぬ。或は

花はしぼみて露なを消ず。といへども夕を

20 待事なし。凡ものゝ心をしれりしより

四十余りの春秋を送る間に。世の不

思議をみる事やゝ度々になりぬ。去ル

安元三年四月廿八日かとよ風烈敷吹て

静ならざりし夜。戌の時はかり都の巽より

25 火出来て。乾に至るはては朱雀門大極

殿大学寮民部省までうつりて。一夜が

程に灰となりにき。火もとは樋口富小

「 1ウ

「 2オ

* 10 「が」の濁点は、朱筆書入れでなく元のもの。

13 「ず」と「死」の間に「△」、その右に「△うまれ」。

15 「身」の右に「イ目」。

* 15 「ば」の濁点は、朱筆書入れでなく元のもの。

16 「へるためし」に対して、その右に「イひ去サレさまいはど」。

17 「りけり」に対して、その右に「イれり」。

19 「ず」と「と」の間に「△」、その右に「△きえず」。

20 「凡」の右に「予イ」。

25 「来」と「て」の間、その右に「り」。 25 「て」と「は」

の間に「△」、その右に「イ△」。

路とかや病人宿せる仮屋より出来ると

なむ。吹まよふ風にとかくうつり行ほどもに。

30 扇をひろげたるごとく末ひろになりぬ。

とをき家は烟にむせび。近きあたりは

一向焰を地に吹つけたたり。空には灰をふき

立たれば。火の光に昧ましてあまねく

紅なる中に風にたえず吹きさられたる炎。

35 飛がごとくにして。一二町を越つゝうつり行

其中の人現心ならんや。或焰にまかれて

忽に死ぬ。或遁れたれども資財を取

出すに及はず。七珍万宝さながら灰煙クワイ

となりなき。其費いくばくぞ此度公卿の

40 家十六焼たりまして其外は数しらず。

すべて都の内三分が一に及へりとぞ男女

死るもの数千人牛馬の類辺際をしらず

人のいとなみ皆おろかなる中に。さしも

危アヤシき京中の家を作るとて賤賤を費し

45 心を悩す事は。すぐれてあぢきなく侍る

「 2ウ

「 3オ

33 「昧まし」に対して、その右に「映じ」。

37 「或」と「遁」の間に「△」、その右に「イ△又はづかに身

一ツ辛くして」。 38 「煙」に対して、天部余白に「燼シ」。

*41 「べ」の濁点は、朱筆書入れでなく元のもの。

42 「牛馬」の右に「イ馬牛」。

45 「く」と「侍」の間、その右に「ぞ」。

べき又治承四年卯月廿九日のころ。

中御門京極の辺より大きなる辻風

発りて。六條わたりまでいかめしく吹ける

事侍りき。三四町をかけて吹まくる間に

50 其中にこもれる家ども大なるもチヒサ小きも

一つとして破ざるはなし。さながら平地に

倒れたるも有桁柱ばかり残るもあり。

又門の上を吹はなちて四五丁が程に

たて又垣をはらひて隣とひとつになせり。

55 況家の内の宝。数を尽して空にあかりムカ

檜ふきの類冬の木の葉の風に乱るゝが

ごとし。塵を煙のごとく吹きたてたれば都て

目もみえず。夥敷なりどよむ音に物

いふ声もきこえず。地獄ゴッの業風なりとも

60 かくこそはとぞ覚えける。家の損亡する

のみならず。是を取繕ふ間に身をそこ

なひかたわつけるもの数を不知。此風ヒツシサル坤の

方にうつり行て。おほくの人の歎をなせり。

「 3ウ

47 「辺」の右に「程」。

49 「く」の右に「はい」。

51 「地」に対して、その右に「イナシ」。

53 「程」の右に「外イ」。

54 「たて」の右に「イおき」。 54 「を」と「は」の間に「○」、
その右に「イ吹」、天部余白に「吹ナキカタ是ナルベシ」。

56 「の」と「類」の間に「○」、その右に「イ○板の」。

「 4オ

「 4ウ

辻風は常に吹ものなれどかゝる事やはある。

65 たゞ事にあらずさるべき物のさとし哉

とぞ疑ひ侍りし。又同年の水無月の

比俄に都うつり侍りき。最も思の外

なりし事也。大かた此京の始を聞ば嵯峨

天皇の御宇都と定りけるより後。已に

70 数百歳を経たり。事なくてたやすく

改むべくもあらねば。是を世の人たやすからず

愁あへるさまことほりにも過たり。されど

兎角いふ甲斐なくて帝より始奉り

大臣公卿悉く移り給ひぬ。世につかふる

75 ほどの人たれか一人故郷に残らん。官位に

思をかけ主君の影を頼むほとの人は。

一日成ともとく移らんとはげみあへり。時を

失ひ世にあまされ。期する所なきものは

愁ながら留りおり。軒を争ひし人の

80 住居日を経つゝあれゆく。家はこぼたれて

淀川にうかひ地は目前に島となる人の

「 5ウ

「 5オ

65 「さ」(字母「散」)の右に「サ」。

* 65 「ゞ」の濁点は、朱筆書入れてなく元のもの。

66 「し」の右に「き」。

67 「も」に対して、その右に「イナシ」。

71 「む」に対して、その右に「イまる」。

73 「奉り」の下に「〇」、その右に「イ〇で」。

78 「れ」と「期」の間に「〇」、その右に「イ〇で」。

心皆改りて。只馬鞍を重しとす牛車

を用とする人なし西南海の所領を願ひ

東北の庄園をば好まず。其時をのづから

85 事のたより有て。撰津の国今の京に至れり

所の有さまをみるに。其地程狭くて

條里テウリをわるにたらず。北は山にそひへて

高く南は海に近くて下れり。波の音常に

嘩カマヒスしくてしほ風ことにはげしく。内裡は

90 山の中なれば。彼木の丸殿もかくやと

中く様かはりて。優ユウなる方も侍りき。日々に

こぼちていつれもせきあへずつれば下す家

いつくにつくるにかあらん。猶むなしき地は

おほく造る家はすくなし。故郷は既に荒て

95 新都はいまだならずありとしある人みな

浮雲の思をなせり。元来此所に居るものは

地を失ひて愁へ。今移り住人は土木の

わつらひ有事を歎く。道のほとりをみれば

車に乗へきは馬に乘衣冠布衣なるべきは

「 6 才

「 6 ウ

82 「を」と「重」の間に「〇」、その右に「イ〇のみ」。

82 「しと」に対して、その右に「イく」。

84 「北」と「の」の間に「〇」、その右に「イ国」。

92 「いつれ」に対して、その右に「イ川」。

92 「つれ」に対

して、その右に「イはこ」。

100 直垂を着たり。都の条理忽に改りて

。只ひなびたる武士に事ならず。是は世の

乱るゝ瑞相哉と聞あひけるもしかし日を

経つゝ世の中うきたちて。人の心も修らす

民の愁終にむなしからざれば。同年の冬

105 猶此京に還り給ひにき。されどこぼち

わたせりし家ども如何に成りけるにか。

悉くもとのやうにも作らず。ほのかに伝聞に。

いにしへの賢き御代には憐^ミを以国を治。

則御殿にかやをふきて。軒をだにもとゝ

110 のえず。煙の^{トモ}乏^{セン}きを見給ひし時は

かきりある御調物をさへゆるされき。是民を

恵み代をたすけ給ふによつて也。今の世の

有さまむかしになぞらへて知ぬべし。又養和

の比かとよ久しくなりてたしかにも覚えず。

115 二年が間に飢渴して浅ましき事侍りき

或は春夏^{ヒデリ}早^ヒ或秋冬大風水など

よからぬ事ども打つゞき五穀悉くみのらず。

京都女子大学図書館蔵元禄頃写『方丈記』紹介

「 7 才

「 7 ウ

102 「哉と」に対して、その右に「イとか」。

103 「す」(虫損

により一部欠)の右に「ず」。

104 「ぎ」と「れ」の間に「〇」、その右に「イ〇りけ」。

「冬」(虫損により一部欠)の右に「冬」。

110 「ひし」に対して、その右に「イふ」。

112 「つ」の右に「り」。

113 「有」の上に「〇」、その右に「イ〇中の」。

115 「に」に対して、その右に「イナシ」、さらにその右に「衍

字敷」。

空く春耕。夏種とるいとなみのみありて。

秋荊冬取るぞめきはなし。是によりて

「 8 才

120 国々の民或は地を捨て境を出。或は家を

忘れて土にすむさまく御祈はじまり。

なべてならぬ法ども行はるれども其驗更に

なし。都のならひ。何かに付ても源ミナモトは田舎を

こそ頼めるに絶てのぼるものなれば。さのみ

125 やはみさをも作りあへむ。念じ侘つゝ

宝物かたはし捨るごとくすれども。更に目に

見たる人なし。たまくかふるものは。金を軽くし」 8ウ

粟を重くす。乞食道の辺に多く愁

悲ふ声耳にみてり。先の年も如此して

130 暮ぬ。翌年アケルはたちなをるべきかと思ふに。

剩えやみうちそひて。まさるやうに跡かた

なし。世の人皆飢死ければ。日をそへ宛ツク

きはまりゆくさま。少水の魚のたとへにかな

へり。はてには笠うちき。足引つゝみ。よろ

135 しき姿したるものひたすら家ごとに

「 9 才

118 「種と」に対して、その右に「うゝ」。天部余白に「夏種なつこる」。

120 「家を」(虫損により一部欠)の右に「を」。

121 「土」に対して、その右に「山」。

122 天部余白に「イ更にそのしるし」。

123 「都」の右に「イ京」。

125 「みさ」(字母「散」)を」の右に「サホ」。

127 「た」と「る」の間に「〇」、その右に「〇つ」。

129 「此」と「し」の間に「〇」、その右に「イ〇辛く」。

132 「そへ」に対して、その右に「イへ」。

135 「に」(虫損により一部欠)の右に「に」。

乞ありく。角わびしれたるもの共ありくかと

見れば則倒れ死ぬ。築地ツイヒチの辻路頭に

飢死る類は数不知。取捨るわざもなければ。

くさき香世界にみちく／＼てかはりゆく形

140 有さま目もあてられぬ事おほかりき。況哉ヤ

河原などには馬車の行違ふ道だにもなし。

あやしき賤山かつも力つきて。薪さへ

乏しく成ゆけば。頼むかたなき人はみづから

家をこぼちて市に出て売るに。一人が持出

145 ぬるあたひ。なを一日が命をつゞけるだに

及はずとぞ。怪事はかゝる薪の中に丹付ニツキ

金銀の箔所々に付て見ゆる。木のわれ

相ましはる有是を尋ればすべき方もなき

ものゝ古寺に至りて仏を盗み堂のものゝ

150 具を破取て割碎ける也けり。濁悪の

世にしも生れあひて。かゝる心うきわさをなん

見侍りき。又哀なる事侍りき。さりがたき

男女など持たるものは。其心ざしまして深きは

「 9ウ

「 10オ

137 「辻」に対して、その右に「つら」。

145 「つゞける」に対して、その右に「イさゝふるに」。

148 「はる有」に対して、その右に「イれり」。
148 「も」に対

して、その右に「イナシ」。

152 「たき」(虫損により一部欠)の右に「き」。

153 「まして」に対して、その右に「イさり」。

必死す。其故は我身を次になして男にも

155 あれ。女にもあれ痛はしく思ふ方に。たま〜

乞得たる物を先ゆづるによりて也。されば

父子有ものは定れる事にて親に先だて

死けり。父母が命尽てふせるをしらず

して。いとけなき子の其乳房にすひ付て

160 ふせるなども有けり。仁和寺に隆暁リウウ法印と

いふ人。かくしつゝ数不知死ぬる事を悲しみて。

聖を余多かたらひて死首の見ゆる毎に

阿字を書て縁に結ばしむるわざをなんせられ

ける。其数をしらすとて四五月が程かぞへ

165 ければ。京の中一條より南九条より北京極

より西朱雀より東の道辺にある首都て

四万弐千三百余なん有ける。況哉其前後に

死るものもおほく。河原に有白川西の京

もろ〜の辺地などを加へていはゞ際限

170 有べからず。如何に況や諸国七道をや。

ちかくは崇徳院の御位の時長承の比

「 10ウ

「 11オ

157 「親」に対して、その右に「ぞ」。

157 「だ」と「て」の間、その右に「つ」。

162 「て」の右に「イツ」。

162 「て」と「死」の間に「△」、

その左に「イ△その」。

164 「五」と「月」の間に「△」、その右に「イ△両」。

167 「に」(虫損により一部欠)の右に「に」。

168 「に有」に対して、その右に「イナシ」。

かとよ。かゝるためし有けるとときく其世の有さまは不知。まのあたりいとめづらかに悲しかりし事也。又元暦の比大なる

175 ふる事侍りき。其さま常ならず山崩れて

川を埋み海かたぶきて陸をひたせり。

地さけて水涌あがり巖われて谷に

まろひ入。渚漕舟は浪にたゞよひ。道行

駒は足の立どをまどはせり。況哉都の

180 辺には在々所々堂舎塔廟一つとして

全からず。或は崩或倒たる間塵灰立

あかり盛なる煙のごとし。地の震フルき家の

破る音雷にことならず。家の中におれば

忽にうちひしげなんとす。走りければまた

185 地われさく。羽なければ空へも上るべからず。

龍ならねば雲にのぼらん事かたし。

おそれぬ中に。をそるべきは唯地震也

其中にある武士のひとり子の六七ばかりに

侍りしが築地の覆の山に小家を作りて。

「 11ウ

「 12オ

172 「し」と「有」の間、その右に「イは」。 172 「く」に対して、その右に「イけど」。

174 「暦」と「の」の間に「△」、その右に「イ△二年」。天部

余白に「異本は後人二年と側に書そへたるが本文へいりしにや」。

177 「地」の右に「つち」。

* 二箇所の「ど」の濁点は、朱筆書入れてなく元のもの。

182 「あか」の右に「イのぼ」。 182 「ぎ」の右に「ひ」。

188 「其中に」以下の右に、「けりとぞ覚え侍りし」。

189 「山」の右に「下」。天部余白に「按下草書の下字ヨリ山ト

190 いとなげなるあとなし事をして遊びしが

俄に崩れ埋られて。跡かたなく平に

打ひしがれて。二の目など一寸ばかり打出され

たるを。父母かゝへて声を惜まず悲しみ

あひて侍りしこそ哀れに悲しく見侍り

195 しか。子の悲しひには。たけきものも恥を

わすれけりとおぼえて。いとをしく理哉とぞ

見侍りし。かく夥敷震事は暫シにて

止にしか。其名残しはらく絶ズ。尋常ヨソツネに

驚く程の地震二三十度ゆらぬ日は

200 なし。十日廿日過にしかば。漸間遠に成て

或は四五度二三度。もしは一日まぜ二三日に

一度など。大かた其名残三月斗や侍りけん

四大種のうちに。水火風は常に害をなせ

ど。大地に至てはことなる変をなさず

205。むかし齊衡サイカウの比かとよ大地震ふりて。

東大寺の仏の御ミぐし落などして。いみじき

事侍れど。猶此度にはしかすとぞ。則みな

「 12ウ

「 13オ

「 13ウ

誤シ也」。 190 「いと」に対して、その右に「イはか」。

「び」と「し」の間に△、その右に「イ△侍り」。

198 「く」と「絶」の間、その右に「イは」。

207 「事」と「侍」の間に「〇」、その右に「イ〇ども」。

無^{アジキナキ}端事をのべて。聊心のに「こりもうすらぐ

か」と見し程に。月日かさなり年越しかば。

210 後は言の葉にかけていひ出す人だに

なし。都て世の有にくき事。我身と

栖との。はかなくあだなるさま如此。況哉

所により身の程に随ひて。心を悩す事

あげてかぞべからず。もしをのづから身

215 かなはずして。権門の傍に居るものは。

ふかく悦^{ヨロコ}ぶ事あれども。大にたのしふに

あたはず。歎き有時も声をあげて啼

事。進退安からずたとへば雀の鷹の

巢に近けるがごとし。もし貧して富る

220 家の隣に居れば。朝夕すぼき姿を

恥て諂ひつゝ出入。妻子僮僕のうら

やめるさまを見るにも。富る家の人の

ないがしるなる気色を聞にも。心念々に

うごひて。時として安からず。もし狭き

225 地に居れば近く炎上するに其害を

「 14才

「 14ウ

207 「則」と「み」の間に「△」、その右に「イ△人」。

216 「事」と「あ」の間、その右に「イは」。

218 「事」と「進」の間に「△」、その右に「△無」。 218 「ず」と「た」の間に「△」、その右に「△立居につけておそれおのゝく」。 220 「れ」に対して、その右に「イる者」。 220 天部余白に「□ぼき□姿」。

224 「ひ」の右に「き」。

225 「するに」の右に「時」。

遁る事なし。もし辺地にあれば往

還の煩多く。盜賊の程離がたし。

勢ひあるものは貪欲ふかく。独身なる

ものは人にかろしめらる。財タカラあれば恐多し。

230 貧しければ歎き切なり。人頼めば身

他の僕ヤツコとなる人を育ば。心恩愛に

つかはる。世に随へば身苦し。又随はねば

狂へるに似たり。いづれの所をしめ。如何なる

業をしてか。しばし此身をやどし。玉ゆらも

235 心をなぐさむべき。我身父母の祖母の

家を伝へて。久しく彼所に住ゑ。其後

縁かけ。身劣りて。忍ぶかた〜しげ

かりしかば。終に踏とむる事をえずして。

三十余にして更に我心と一つの庵を

240 結ぶ。是を有し住居になそらふるに

十分が一也。唯居屋ばかりを構て。はか〜

しくは造るに及ず。纒につみんぢを

つけりといへども。門たつるにたつきなし

「 15ウ

「 15オ

227 「程」に対して、その右に「難」。

229 「多し」に対して、その右に「いく」。

231 「る」の右に「り」。

237 「劣り」に対して、その右に「イおとろへ」。

238 「踏」に対して、その右に「イ跡」。

241 天部余白に「居屋 今いふ居間」。

242 「は」と「造」の間に「△」、その右に「イ△屋を」。

「ん」の右に「ひ」。

242

竹を柱として車やどりとせり。雪降

245 風吹ごとにあやうからずしも非ず。所は

河原ちかければ水の難深く。白波の

恐もさはがし。都^{スベテ}あらぬ世を念じ□しつゝ

「 16 才

なやませる事は三十余年也。其間折々

の□^たがるめに。をのづから短運^{サト}を了り

250 ぬ。則五十の春を迎へて家を出て

世をそむけり。元来妻子なければ捨

がたきよすがもなし。身に官禄あらず

何に付てか執心をとどめん。むなしく

大原山の雲に。いくそぼくの春秋をか

255 経ぬる。爰に六十の露消がたに

及て。更に末葉のやどりを結べる事

あり。いはゞ狩人の一夜の窓を作り。

老たるかいこのまゆをいとなむがことし。

是を中比の栖になぞらふれば。又百分が

260 一にだにも及はず。とかくいふ程に齡は

年々にかたぶき。栖は折々に狭し。

「 16 ウ

248 「な」の上に「△」、その右に「△心を」。

249 「る」の右に「ひ」。

* 249 不明文字□の上から「た」と重ね書きし、右に「た」。

250 「出て」に対して、その右に「イナシ」。

257 「窓」の右に「宿」。

* 260 「ず」の濁点は、朱筆書入れでなく元のもの。

其家の有さま尋常ならず。広さは

わづか方丈。高さは七尺がなち也。所を

思ひ定めざる故に。地をしめて作らす。

265 土居をくみ。打覆をふき。てづき目毎に

かけがねを掛たり。もし心にかなはぬ事

あらば。やすく外に移さむが為也。其改め作る

時いくばくの煩かある。積る処纒に二両也。

車の力を報ふる外は更につかといらず。

270 今日野山の奥に跡をかくして。南のかりの

日かくしをさし出して。竹の簀子をしき

其西に闕伽棚を作り中には西の垣に

そへて阿弥陀の画像を安置し奉り

て落日をうけて眉間の空とす。ひ

275 てうの扉に。普賢并に不動の像を

かけたなり。北の障子の上にちいさき棚を

構て。黒革籠二三合を置。則和歌

管絃往生要集ごときの抄物を

入たり。かたはらに箏琵琶各一帳を

「 17 才

「 17 才

「 18 才

263 「な」の右に「う」。

269 「つかと」に対して、その右に「用途」。

270 「南の」に対して、その右に「に」。

271 天部余白に「日かくし、ひさし也」。

274 「空」に対して、その右に「光」。 274 「ひ」に対して、その

右に「彼」。

275 「てう」に対して、その右に「帳」。

277 天部余白に「黒革籠イ黒字ナシアルカタ是歟」。

280 たつ。所謂おりことふつぎ琵琶是也。

東にそへてわらびのをどろをしき。

つかなみをしきて夜の床とす。東の

垣に窓をあけて爰に長く机フツクエを作り

出せり。枕の方にすいびつ有。是を

285 正木折くぶるよすがとす。庵の北に少セウ

地をしめ。あばらなるひめ垣をゆはして

菌とす。もろくの葉草を植たり。仮の

庵の有さま如此。其所のさまをいはゞ

南になかめ有岩を畳て水をためたり。

290 月軒近ければ妻木を拾ふに乏し

からず。名をとやまといふ。正木のかつら

跡を埋めり。谷しげれど西は晴たり。

観念の便なきにしもあらず。春は藤浪

を見るに。紫雲のことくして西の方に

295 にほひ。夏は時鳥を聞かたらふごとにしで

山路を契る。秋は日くらしの声耳に

満ミテり。空蟬の世をかなしむときこゆ。冬は

「 19
才

「 18
ウ

280 「ふつ」に対して、その右に「つ」。

281 天部余白に「おどろイニほどろある非也」。

282 天部余白に「つかなみ」。

283 天部余白に「長くイニナシ出しぶづく多也」。

284 「い」に対して、その右に「衍字」。

285 「正木」に対して、その右に「柴」。

286 「ゆはし」に対して、その右に「イかこひ」。

287 「す」と「も」の間、その右に「イ則」。

289 「に」の右に「に」。 289 「なかめ」に対して、その右に

「かけ樋」。 290 「月」に対して、その右に「林」。

294 「見るに」に対して、その右に「イナシ」。

295 「にし」の右下に「に」。 295 「で」の下に「の」。

雪をあはれみ積消るさま罪障に

たとへつべし。もし念仏ものうく読経

300 まめならぬ時はみづから休みみつから念

ずるに妨るに人もなく。又恥べき友もなし。

殊更に無言をせされども。独り居れば

業ゴラをへし。必禁戒を守るとしもは

なけれども。境界なれば何につけてか破

305 らむ。もし跡の白波に身をよする朝には。

岡の屋に行かふ舟を詠て。満沙祢が風情

を盗み。もし桂の風ばちをならず夕

には。潯陽グントトクの江を思ひやりて。源都督

の流れをならふ。もし余りに興あれば

310 しはく松の響に秋風の楽をたくへ。

水の音に流泉の曲を操る。芸はつた

なければ人の耳をよろこはしめんとにも

あらず。独しらべひとり詠してみづから心を

養ふはかり也。又麓に一つの柴の庵有。

315 則此山守居オレ所なり。かしこに小童有。

「 19ウ

「 20オ

298 「み」の右に「イむ」。

299 「う」「か」にも見える」の右に「う」。

300 「ぬ」に対して、その右に「イざる」。

301 「妨るに」に対して、その右に「イおこた」。

302 「言」の右に「言」。

303 「業」の上に「口」。

303 「へ」に対して、その右に「をさめつべ」。

303 「必」の右に「必」。

303 「は」に対して、その右に「衍字」。

304 「な」と「れ」の間に「〇」、その右に「〇け」。

310 「に」に対して、その右に「イナシ」。

311 「は」と「つ」の間に「〇」、その右に「〇これ」。

時々来りて相ともなふ。もしつれなく

なる時は是を友としてあそひありく。

彼は十六我は六十其齡事の外なれど

心なくさむる事は同じ。或はつばなをぬき。

320 岩なしを取。又ぬかごをもち。芹をつみ。

すそ川の田井に至りて。落ぼをひろいて

ほくみを作る。もし曰うらゝかなれば

峯によちのほりて遙に故郷の雲を望み

木幡山伏見の里鳥羽々束師をみる。

325 勝地は主なければ心を慰るに障なし。

歩みわつらふ時もなし。遠く至る時は是より

峯つゞき。すみ山を越笠取をすぎて。

岩間にまふで。石山を拝み。もしはまた

粟津の原を分て。蟬丸翁があとを

330 太夫か墓を尋ぬ。帰るさには節に

つけつゝ桜をかり。紅葉を求わらひを

折。木の実をひろひては仏に奉り

「 20ウ

「 21オ

316 「な」の右に「ら」。

318 「は」と「十」の間に「〇」、その右に「イ〇歳」。

319 「心」と「な」の間、その右に「を」。 319 「事」と「是」

の間に「〇」、その右に「イ〇は」。 320 「み」の右に「イ
む」。 321 「す」の右上に「或は」。

322 以降の天部余白に「ほくみ穂組角力草の類の手あそびか
又食類歟イ本ほみトアリ元隣本ほぐみトにこりをう
ちたり」。

326 「ふ時も」に対して、その右に「ひ」。 326 「し」に対して、

その右に「く」。 326 「し」と「遠」の間に「〇」、その右

に「志」。 328 「ふ」に対して、その右に「う」。 328 「み」

の右に「む」。 330 「した」に対して、その右に「とふら」。

330 「瀬」「の」を消し、「の」の右に「田」。また、「瀬田の

川」に対して、天部余白に「田上川」。 330 「の」に対して、

その右に「上」。 331 「節」に対して、その右に「折」。

333 「て」と「は」の間に「●」、その右に「●且」。

且は家つとにす。もし夜静なれば窓月

335 故人を忍。猿の声に袖をうるほし。

草むらの蛩は遠く真木の嶋のかゝり火に

まがる。暁の雨はをのづから木葉ふく風に

似たり。山鳥のほろ／＼と鳴を聞て

父か母かと疑。嶺の風軒ちかく馴たるに

340 つけても世に遠ざかるほとをしる。或は

埋火をかき起して老の寢覚の友

とす。おそろしき山ならねど。梟の声

を憐アハレにつけても山中の景気折にふれて

尽る事なし。況哉ふかく思ひ。深く

345 しられむ人の為には限るべからず。大かた

此所にすみ初し時はあからさまと思ひ

しかといまゝでに五年をへたり。仮の

庵も良古屋ヤフルとなりて軒にはくち葉

ふかく。土居苔むせり。をのづから事の

350 便ノチに都を聞ば。此山に籠り居て後

やんことなき人のかくれ給へるもあまた

「 21ウ

「 22オ

「 22ウ

335 「し」の右に「す」。

337 「る」に対して、その右に「ひ」。 337 「を」の右に「お」。

339 「風」に対して、その右に「かせぎの」。

343 「憐」と「に」の間、その右に「む」。 343 「ふれて」の右

に「イつけて」。

345 「れ」に対して、その右に「ら」。 345 「為」に対して、そ

の右に「為」。

349 「を」の右に「お」。

きこゆ。まして其数ならぬ類尽して是を
しるすべからず。度々タビタビの炎上にほころび
たる家。又いくばくぞ。唯仮の庵のみ

355 のどけくして恐なし。程せばしといへども。

夜臥床有昼居る座有。一身を

宿すに不足なし。ごうなは小き貝を

好む。是よく身を知ルによつて也。みさこは

荒磯に居る。則人を恐るゝによつて也。

360 我又如此。身を知世をしらば。不ネガハ願マシラハ不レ交マシラハ

只静なるを望みとし。愁なきをたの

しみとす。都て世の人の住家を造る

ならひ。必しも身の為にはせず。或は妻子

眷属の為に造り。或は親昵シツ朋友の

365 為に作り或は主君師匠の財宝

馬車の為に造る。われ今身の為に

結べり。人の為に不レ造。故如何となれば

今の世のならひ。此世の有さまともなふ

べき人もなく。頼むべき奴もなし。たとひ

「 23 ウ

「 23 オ

353 「こ」に対して、その右に「衍字」。

358 「つ」の右に「り」。

360 「し」と「ら」の間、その右に「れ」。

365 「り」の右に「る」。
365 「君」の右に「君」。

366 「車」の右に「イ牛」。
366 「に」と「造」の間に「〇」、
その右に「〇さへ是を」。

370 広く作れりとも誰を愛し誰を

居ん。夫人の友たるものは富るを貴とみ

ねんごろなるをさきとす。必しも情有とカナラズ

すなほなるをば愛せず。唯管絃花月

を友とせむにはしかず。人の奴たるものは

375 賞罰の甚きをかへりみ恩の厚を

重くす。更にはこくみ憐むといへども。

やすく閑なるをば願はず。唯我身を

奴とするにはしかず。もしすべき事

あれば。則自身をつかふたゆからずも

380 あれど人をしたがへ人をかへりみるよりは

やすし。もしありくべき事あれば歩み

苦しといへども。馬鞍牛馬と心を

悩すには似ニず。今一身を分ハカチて此用を

なす。手のやつこ足のノリモノ駕よく我心に

385 かなへり。心に身のくるしみをしればくる

しむ時は休めまめなる時はつかふとても

度々過スさるものうしとて心を動す事

「 24ウ

「 24オ

370 「愛」の右に「イ宿」。

373 「管絃」の右に「イ糸竹」。

379 「ず」と「も」の間に「し」。

381 「み」に対して、その右に「む」。

385 「し」と「れ」の間に「〇」、その右に「イら」。

386 「め」と「ま」の間に「〇」、その右に「イ〇つ」。

386 「は」と「つ」の間に「△」、その右に「△つかふ」。

なし。如何に況哉常にありき常に

うこく。是養生なるべし。何そ徒に

390 休み居らん。人を苦しめ人をなやますは

又罪業也。如何他の力をかるべき

衣食の類タツヒまた同し。藤の衣麻の袈

得ゑにしたがひてはだへをかくし。野の

つばな峯の木の实。命をつぐ斗也

395 人にまじはらざれば姿を恥る悔もなし。

糧乏しければおろそかなれともなを

味をあまねくす都てかやうの事を

たのしく。富る人に対していふには

あらず。我身ひとつにとりてむかしと

400 今とをたくらぶる也。大かた世をすて

身を捨しより恨もなく恐もなし命は

天運にまかせて惜まざいとはず。身を

うき雲になぞらへて頼たまずま〇しと

せず。一期のたのしひは転寝の枕の

405 上にきはまり。生涯の海は折々の美

「 25 才

「 25 ウ

387 「る」に対して、その右に「イず」。 387 「て」と「心」の

間に「●」、その右に「●も」。 389 「く」と「是」の間に

「○」、その右に「○は」。

393 「野」と「の」の間、その右に「イ辺」。

397 「事を」に対して、その右に「イナシ」。

399 「す」と「我」の間に「△」、その左に「たゞ」。

400 「すて」に対して、その右に「のがれ」。

* 403 「〇」は朱筆書入れでなく元のもの。ただ、濁点のみは

朱筆書入れ。

405 「海」に対して、その右に「望」。

景に残れり。それ三界は心ひとつ也

もし心やすからすは牛馬七珍もよしなし。

今さびしき住居一間の庵。みづから

是を愛す。をのづから都を出ては

410 乞食と成事を恥といへどもかへりて

爰に居るときは他の俗塵に着す

る事をあはれむ。もし人かくいへる

事を疑はゞ魚鳥のありさまとみよ

魚は水にあかず。鳥は林をねがふ。

415 鳥にあらされは其心をしらず。閑居の

気味も又如此。住ずして誰か悟らむ。

そもく一期の月影かたぶきて。余

算山の端に近し。忽に三途の闇に

むかはん時いつれのわだをかかこたんと

420 する仏の人を教へ給ふおこりは。事に

ふれて執心なかれと也。今草の庵も

愛するを科とす。閑斎に着するも

障なるべし。如何用なき楽みをのべて

「 26 才

「 26 ウ

「 27 才

407 「なし」の右に「く」。
上に「イ△宮殿望なし」。

407 「なし」の下に「△」、その左

416 「ら」の右に「さ」。

419 「いつれ」に対して、その右に「何」。

421 「も」の右に「を」。

422 「を」の右に「も」。

422 「斎」の右に「寂」。

むなしくあたら時を過さん。静なる

425 晝此理りを思ひつゞけて。みづから

心に問て曰。世を遁て山林にまじ

はるは。心をおさめて道を行はん為也

しかるを汝か姿は聖に似て心は

濁にしめり。栖スミカは則浄名居士の

430 跡をけがせるといへども。たもつところは

纒に周梨槃特が行にも及はず

もし是貧賤の報のみづから悩すか。

将又妄念のいたりて狂はせるか。其時

心更に答る事なし唯かたはらに

435 舌根をやとひて。鼻鐘の念仏

両三返申てやみぬ。于時元暦の二

とせ弥生晦日のころ桑門蓮胤

外山の庵にして是をしるす

月影は入山の端もつらかりき

440 たえぬひかりを見ぬよしも哉

「
28 才

「
27 ウ

431 「に」と「も」の間、その右に「だに」。

【校異】元禄頃写『方丈記』と嵯峨本『方丈記』

・嵯峨本との校異を、句読点・振り仮名・濁点の有無、漢字の宛て方や仮名遣い・送り仮名の相違、および漢字と仮名の相違を基本的には除いて、以下に列挙する。また、嵯峨本が「跡」を「隠」と誤っていることによる差異は、校異として挙げていない。

・行番号とともに元禄頃写本の本文を掲げ、その下の括弧内に対応する嵯峨本の本文を載せた。

・波線部は、元禄頃写本にあって嵯峨本にない本文、実線部は、嵯峨本にあって元禄頃写本にない本文。二重実線部は、両本の間で相違する本文。

・青木侂子編『広本略本方丈記総索引』（武蔵野書院、昭40）が取り上げる、嵯峨本以外の広本系の伝本計十六本のうちのいずれかに見られる本文である場合は、同伝本の漢字一字の略称（右青木編書に拠る）を、「||大前山西親現叡氏名龍習／兼近京」「||大前龍／○」などと列記した。┌┐の上が古本系統伝本、下が流布本系統伝本で、○は、系統内に共通本文を持つ伝本がないことを意味する。漢字一字の略称を全く示していない本文は、右十六本に嵯峨本を加えた計十七本には共通本文の全く見られない、独自のものであるということになる。

・行番号を□で囲んだ本文は、柳亭種彦が異本注記を加えているもので、概ね（ ）内の嵯峨本本文と同様の正保版本本文の類を異本文として注記している。

- 1凡(行) 3世界(世の中) 6世々(代々) ||大前龍／○ 12けり(ける) 13死る(むまれ死ぬる) 15身(目) 16争へる(ためし(あらそひ去様いは)) 17残りけり(残れり) 19といへとも(きえずといへ共) ||山西氏名習／○ 25出来て(出来りて) ||大前山西親現叡氏名龍習／兼近京 25はては(はてには) ||親現叡氏名／○ 28病人(病人を) 28出来る(出来ける)

33 味まして(映して) 36 或焰(或は煙にむせひてたふれふし或は炎) 36 まかれて(まくれて) 37 或遁れたれとも(或は又わ
 つかに身一からくして遁たれ共) 37 取出す(取出る) 38 灰煙(灰燼) 39 いくはくそ(いくそはくそ) 39 山
 親龍習/○ 42 牛馬(馬牛) 45 あちきなく(あちきなくそ) 47 辺(程) 47 程 47 現氏名龍/○ 51 平地に(平
 に) 52 残る(のこれる) 54 たて(置) 54 はらひて(ふきはらひて) 56 檜(檜皮) 56 ふき(ふき板) 67
 最も(いと) 69 御宇(御時) 69 定りける(定まりにける) 71 改む(あらたまる) 73 奉り(奉て) 78 あまされ
 (あまされて) 82 只馬鞍を(たゞ馬鞍をのみ) 82 西/○ 82 重しとす(をもくす) 84 東北(東北国) 84 大
 85 撰津の国(撰津の国) 87 そひへて(傍て) 92 いつれも(川も) 92 つれひ(運ひ)
 93 つくる(作れる) 102 聞あひける(聞をける) 102 しかし(しるく) 104 むなしからされは(空しからさりければ) 106 成りけ
 る(なりにける) 110 見給ひし(見給ふ) 112 よつて(よりに) 112 世(世中) 119 よりて(よつて) 126 かたはし
 113 なそらへて(なすらひて) 115 間に(間) 118 種とる(種る) 119 よりて(よつて) 126 かたはし
 龍/兼近 121 土(山) 122 其験更になし(更に其しるしなし) 123 都(京) 123 何か(何は) 126 かたはし
 より) 126 目に(目) 127 龍/○ 127 見たる(見たつる) 129 年(年) 129 如此して暮ぬ(かくのことくからくして暮ぬ) 129 山西
 親現龍/○ 130 翌年(明年) 132 日をそへ宛(日をへつ) 137 辻(つら) 140 おほかりき(おほかり) 148 ましはる有(ま
 142 薪さへ(薪にさへ) 145 つまける(さふるに) 147 金銀(白かねこかね) 148 ましはる有(ま
 しれり) 148 方もなき(方なき) 153 男女(女男) 153 まして(まさりて) 154 我身を(我身をは) 157 親に(親そ) 157 現
 /○ 157 先だて(さき立て) 158 死けり(死にける) 159 すひ付て(すひつきつ) 162 かたらひて(かたらひ
 つ) 162 死首(其死首) 164 四五月(四五両月) 164 かそへければ(かそへたりければ) 168 河原
 有(河原) 169 際限(際限も) 172 有ける(有けり) 172 きく(聞と) 174 元暦(元暦二

年〔177〕地〔土〕兼近／〇〔181〕立あかり〔立上り〕兼龍／〇〔182〕あかり〔上りて〕〔183〕破る〔やふる〕西名龍／〇〔184〕走り
 ければ〔はしり出れば〕〔187〕おそれぬ〔をそれの〕〔187〕をそるへき〔恐るへかりける〕〔187〕地震也〔地震成けりとぞ覺侍し〕〔188〕武
 士〔武者〕〔189〕山〔下〕〔190〕いとなげなる〔墓なげなる〕〔190〕遊びし〔あそひ侍りし〕〔192〕打ひしかれて〔打ひさかれて〕〔195〕悲し
 ひ〔かなしみ〕〔198〕しはらく〔しはく〕〔199〕ゆらぬ〔ふらぬ〕〔203〕うち〔中〕〔207〕事〔事共〕〔207〕侍れと〔侍りけれと〕〔207〕みな
 〔人みな〕〔210〕いひ出す〔いひ出る〕〔218〕事〔事なし〕〔218〕安からず〔安からず立居に付て恐れをのく〕〔219〕貧して〔貧敷して〕
 〔220〕居れば〔をる者は〕兼習／〇〔224〕うこひて〔うこきて〕〔225〕炎上するに〔炎上する時〕〔226〕通る〔のかる〕〔226〕往還〔往反〕
 〔226〕往還の〔往反〕兼西取氏名龍／〇〔227〕程〔難〕〔229〕かろしめらる〔かるしめらる〕兼西親現取氏名龍習／〇〔229〕多し〔多く〕
 〔230〕人〔人を〕〔231〕なる〔なり〕〔234〕しはし〔しはしも〕〔237〕劣りて〔おとろへて〕〔238〕踏〔隠〕跡の誤り〔240〕なそらふる〔な
 つらふる〕兼親現習／〇〔242〕造る〔屋を作る〕〔242〕つみんち〔ついひち〕〔248〕なやませる〔意をなやませる〕〔249〕たかるめ〔たか
 ひめ〕〔250〕出て〔出〕兼大現名習／〇〔253〕執心〔執〕〔257〕窓〔宿〕〔259〕なそらふれば〔なすらふれば〕兼親／兼近〔263〕わつか
 〔わつかに〕兼西／〇〔263〕なち〔うち〕〔264〕定めさる故に〔定めさるか故に〕兼西習／〇〔268〕積る〔つむ〕〔269〕つかと〔用途〕〔270〕
 南〔南に〕〔274〕空〔光〕〔274〕ひてう〔彼帳〕〔277〕黒〔くろき〕兼山習／〇〔277〕二三合〔三四合〕兼西／〇〔279〕帳〔張〕〔280〕ふつ
 き琵琶〔つき琵琶〕〔281〕をとろ〔ほとろ〕〔283〕爰に長く机を〔爰にふつく多を〕〔284〕すいひつ〔すひつ〕〔285〕正木〔柴〕〔286〕ゆはし
 て〔かこひて〕〔287〕もろくの〔則諸の〕〔289〕なかもめ〔かけ樋〕〔290〕月〔林〕〔294〕見るに〔見る〕〔295〕にほひ〔にほふ〕兼習／〇
 〔295〕して〔しての〕〔298〕あはれみ〔憐む〕〔300〕念する〔をこたる〕〔301〕妨るに〔さまたくる〕〔303〕業〔口業〕〔303〕へし〔おさめつへ
 し〕〔303〕守るとしもは〔守るとしも〕〔304〕なれば〔なければ〕〔308〕思ひやりて〔想像て〕兼大前山西親現取龍習／兼近天〔309〕余り
 〔あまり〕〔310〕響に〔ひき〕兼大前山西親現取氏名龍習／兼近〔311〕芸は〔芸は是〕〔315〕山守〔山守か〕〔316〕相ともなふ〔相と
 ぶらぶら〕〔318〕十六〔十六歳〕〔319〕心〔心を〕〔320〕つみ〔つむ〕兼習／〇〔321〕すそ川〔或はすそ川〕〔321〕ひろいて〔ひろひて〕兼山／

○ 323 雲(空) 326 わつらふ時も(煩) 326 なし(なく) 326 遠く(志遠く) 328 まふて(まうて) 328 親現習／○ 328 拜み(おかむ) 330 したひ(とふらひ) 330 瀬田の川(田上川) 331 帰るさ(帰さま) 331 大前山親現取氏名龍／天正 333 ひろひては(ひろひて且は) 334 窓(窓の) 335 うるほし(うるほす) 337 まかる(まかひ) 337 風(嵐) 339 風軒(かせぎの) 343 ふれて(つけて) 343 ふれて(つけても) 345 大山親現取／○ 345 しられむ(しれ覽) 345 限るへからす(是にしも限るへからす) 353 するへからす(しるへからす) 353 前／○ 353 ほころひたる(ほろひたる) 354 いくはくそ(いくそはくそ) 358 よつて(よりにて) 359 よつて(よりにて) 360 しらは(しれらは) 361 たのしみ(樂ひ) 368 此世(此身) 370 誰を(誰をか) 365 師匠の(師匠及) 366 為に造る(為にさへこれをつくる) 368 此世(此身) 370 誰を(誰をか) 365 作り(つくる) 370 愛し(宿し) 370 誰を居ん(誰をかすへむ) 373 すなほなるをは(直ほなるとをは) 373 管絃(糸竹) 376 憐む(あはれふ) 381 歩み(あゆむ) 寂龍習／兼近 379 たゆからすも(たゆからすしも) 380 あれと(あらねと) 381 歩み(みつからあゆむ) 381 歩み(あゆむ) 381 歩み(あゆむ) 此(二の) 385 心に(ころ又) 385 しれは(しれらは) 386 親取氏名習／○ 386 休め(やすめつ) 386 山親現取氏名習／○ 386 つかふとも(つかふつかふとも) 387 過ぎる(過ぎす) 387 ものうしとて(物うしとて) 389 うごく(動は) 393 野(野辺) 397 あまねくす(あまくす) 397 事を(事) 399 我身(唯我身) 399 前／○ 400 すて(遁れ) 402 身を(身をは) 403 なそらへて(なすらへて) 406 心ひとつ(たゞ心一つ) 407 もし心(ころもし) 407 よしなし(由なく) 397 山習／○ 407 よしなし(由なく宮殿望みなし) 409 都を(みやこに) 412 あはれむ(あはれふ) 397 大山親現取習／兼近 412 かく(此) 413 ありさまと(分野を) 414 あかす(あかすうほにあらされは其心をしらす) 419 いつれ(何) 397 取氏名／○ 419 わた(わさ) 421 庵も(庵を) 422 愛するを(愛するも) 422 閑斎(閑寂) 430 けかせる(けかせり) 431 行にも(行にたにも) 397 習／○ 433 妄念(妄心) 435 庵鐘(不請) 436 両三返(両三返を) 397 大龍習／○ 436 元暦(建暦) 437 弥生(弥生の) 397 習／○ 437 晦日(晦日) 397 前山西親現取龍／○ 440 見ぬ(みる)

住家と世言と毎へたるは神呪の
 露のしるすとあるは露也るは花枝
 あり。ゆるといふは神りしりよ。或を
 花の志るして露也るは花枝と
 流るるし。凡そこの字も書きしり
 心下筋のる美秋と送るなり。世のふ
 思儀とて流るるや。度くるなり。志
 安元三年。元禄九年。

峯なりとて、又なほとてさむ。芥といふ
或
 せう川の舟舟しなして、落ぶとて、さむ
カカカ
 せとていふ。とーロウといふ。さむ
前の方等
の類の
又名目親類
イサ
カク
カク
カク
カク
 峯しとのりて、遠く、海つきの、さむ
 不情、い見んの里島、舟、乗師とて
 舟他、主ると、いふと、舟とて、乗師
 舟とて、いふと、いふと、舟とて、乗師
 舟とて、いふと、いふと、舟とて、乗師

【筆跡対照】元禄頃写『方丈記』・『草短歌』・『吉原買もの調』

・元禄頃写『方丈記』の朱筆書込と、『草短歌』の柳亭種彦白筆書込あるいは『吉原買もの調』付載柳亭種彦白筆標注（「柳翁標注」）との間に共通して存在し、特徴的な面があるかと見られた文字を、いくらか適宜拾い出した。

・『草短歌』は新日本古典籍総合データベースに、『吉原買もの調』は天理図書館善本叢書叢書部第十一卷『遊女評判記集』（八木書店、昭48）に、各々拠る。

・元禄頃写『方丈記』の文字を各列の右側、『草短歌』『吉原買もの調』の文字を同左側に配した。

・各文字の所在は、元禄頃写『方丈記』の場合は「(1才)」、『草短歌』の場合は「(1才)」、『吉原買もの調』の場合は「(1才)」、などと示した。「前遊」「後遊」は、前遊紙・後遊紙。

		(18ウ)		(21才)		(2才)
		(3才)		(22才)		(3才)
		(2才)		(3才)		(4才)
		(3才)		(18才)		(1才)
		(2才)		(7才)		(2才)
		(3ウ)				(3才)

〔前遊〕	異	異 (11ウ)	〔5才〕	三	三 (14ウ)	〔前遊〕	カ	カ (14ウ)
〔6才〕	異		〔6才〕	三	三 (16才)	〔4ウ〕	カ	カ (14ウ)
〔7ウ〕	異		〔6才〕	三		〔20ウ〕	カ	カ (15ウ)
〔9才〕	角	角 (21才)	〔前遊〕	草	草 (12ウ)	〔1才〕	カ	カ (19ウ)
〔1才〕	角		〔3ウ〕	草	草 (21才)	〔5才〕	カ	カ (22才)
〔3才〕	角		〔4才〕	草		〔5才〕	カ	
〔前遊〕	誤	誤 (12ウ)	〔6才〕	草		〔後遊〕	カ	カ (16才)
〔20ウ〕	誤		〔2ウ〕	年	年 (11ウ)	〔2才〕	カ	カ (16ウ)
〔21ウ〕	誤		〔2ウ〕	年	年 (11ウ)	〔5ウ〕	カ	カ (23ウ)
〔5才〕	兩	兩 (11才)	〔3ウ〕	年		〔6ウ〕	カ	